

教相の伝統

曾 我 量 深

一

浄土真宗や浄土宗では、阿弥陀仏の四十八願が注意され、そこに真実の願と方便の願とが決定されております。これは大体まあ教相判釈というような問題ですね。教相判釈というのは、やはりそれは法然とか親鸞とかいう、そういう方々の、仏教におけるひとつの史観、歴史観であります。教相判釈というのは歴史観であると、そう私は諒解しております。だからそういう歴史観というものがあって、そして四十八願について方便と真実というものを決められた。だけれどもこれは法然上人や親鸞聖人御自身の立場から方便・真実というものを決めてある。だからして反対の考え方というものもまたある。さようなことがあるものだから、それで『歎異抄』の第二条の御物語を読んでみますと、

弥陀の本願まことにおはしまさば、釈尊の説教虚言なるべからず。仏説まことにおはしまさば、善導の御釈虚言したまふべからず。善導の御釈まことならば、法然のおほせそらごとならんや。法然のおほせまことならば、親鸞がまふすむね、またもてむなしかるべからずさふらう歟。(聖全二七七四)

まあここでは、教相ということがでておらないで、ただ法然上人が師と仰いでいらっしやる善導大師と、親鸞聖人が師として仰いでいらっしやる法然上人がいわれています。真宗という言葉は、これは大体まあ善導大師と法然上人

のうえだけにある。法然上人のことは、「正信偈」を見ましても、「本師源空仏教に明らかにして、善惡の凡夫人を憐愍して、真宗の教証を片州に興し、選択の本願を惡世に弘め」る。真宗の教相というところ、選択本願ということと深い関係をもっておるのでありましょう。それだけでない。この善導大師につきましても、聖人のお言葉では「真宗遇ひ匡し」。「正信偈」は、いま私も読んでおります「正信偈」には、善導章のところには真宗という言葉はありませんけれども、もうひとつ「文類正信偈」というのがありますね。「善導独り仏の正意に明らかにして、深く本願に籍りて真宗を興したまふ」と。「深籍本願興真宗」というように言われる。そして次に「矜哀定散興逆惡」。このように真宗という言葉は「文類正信偈」にある。「深く本願に籍りて真宗を興し」とこういう言葉を祖師聖人によって、善導大師の遺志をとられておられる。皆様も御承知の通り、善導大師の後継ぎの法照禪師というお方のお言葉を「行の巻」に引用されて、「念仏成仏これ真宗」と。「念仏成仏これ真宗」という言葉が、法照禪師の『五会法事讚』の文章から引いてあります。

それで『歎異抄』第二条では、善導大師、法然上人の伝統というものを述べておられるのであります。そうしてですね。諸君御承知の通り、「愚身の信心におきてはかくのごとし。このうへは、念仏をとりて信じたてまつらんと、またすてんと、面々の御はからひなりと云々」。これはまあ、いろいろな解釈があるかと思ひます。今でも、どういふように解釈するかということ、その人その人によって解釈の仕方が色々あるだろうと思うのであります。私たちは、こういういろいろ考えてみますとですね。これは「念仏成仏これ真宗」といふ、そういう善導大師、法然上人の伝統。まあそれからさかのぼって弥陀の本願とか、釈迦の説教といふことでおっしゃるのであります。そして「法然のおほせまことならば、親鸞がまふすむね、またもてむなしかるべからずさふらう歎」。それから「詮ずるところ、愚身の信心におきてはかくのごとし。このうへは、念仏をとりて信じたてまつらんと、またすてんと、面々の御はからひなり」と。これはやっぱり念仏を信ずる、そういう伝統がある。それから念仏を捨てて、諸善万行を

とる、そういう伝統もある。伝統が二つあるのでしょうか。阿弥陀仏の本願というものは、諸君御承知の通り、第十八願と第十九願と二つの願だと思ふのです。十八願と十九の願が対抗している。二十の願は十八願・十九の願の問題を、それを体得するひとつの鍵なんでしょう。十八願は念仏往生の願、十九の願は諸行往生の願。諸行往生の願は善人往生の願。こうなっているのですね。『敦異抄』第三条においてはですね。「善人なおもて往生をとぐ、いかにいはんや悪人をや」というのは、第十八願の思召しである。そしてそれから「しかるを、世のひとつねにいはいはく、悪人なお往生す、いかにいはんや善人をや」というのは、これは十九の願の思召しでしょうね。十八願は「善人なおもて往生をとぐ、いかにいはんや悪人をや」。十九の願の方は「悪人なおもて往生をとぐ、いかにいはんや善人をや」。こういう主張ですね。十九の願を真実の願と考えるのに対して宗祖は「一旦そのいはれあるにたれども」。一応その考えは道理はあるように思われるが、しかしながら本願他力の意趣にそむいている。こう言われますね。それから「そのゆへは」という言葉を入れてあります。本願他力の意趣がどういふところにあるか。本願他力は悪人往生。ところが「世のひとつねにいはいはく」といふ方は、善人往生。悪人往生はいわゆる他力本願の問題である。それから善人往生の自力の願は、つまりこれは自力本願の問題である。

二

阿弥陀仏の本願といえば、他力本願だと私も、浄土真宗ではこういうように理解しております。しかし、そうと一概に決めるわけにはいかないのでありましょう。だから「このうへは、念仏をとりて信じたてまつらんとも、またすてんとも、面々の御はからひなり」。だから、ここで伝統は二つあってですね、念仏を得て信ずるといふ伝統もあれば、念仏をすてて、そして諸善万行を積むといふ伝統もある。つまり十八願を信ずるところの伝統と十九の願を信ずるところの伝統と二つある。十九の願には念仏といふ言葉はありませんけれども、修諸功德といふ言葉があります

ね。諸々の功德を修するという、その中に念仏も入る。つまりひとつこれは何でしょう、万行随一の念仏である。諸善万行といえはすね、その中に念仏も入る。で、その第十九の願の念仏は、万行随一の念仏である。これは何です、東本願寺の高倉学寮の第二代目の慧然講師のお説です。慧然師が、十八願、十九願、二十の願の三願が共通していると、そういうことを言っておられますすね。第十九の願の念仏は、万行随一の念仏だ、と領解されている。それにつきましてはすね、また反対する人もあります。お念仏は十九の願にもあるようだけれどもすね、二十の願にあるのだと。万行随一のお念仏などという、そういう念仏はない。万行の中にお念仏があるようであるけれども、それは万行随一ではない。お念仏というのは、やはり一向専念という、そういう特質がある。一応みれば万行随一のように見えますけれどもね、念仏そのものは万行随一ということはないんであって、念仏はどうしても一向専念である。そういう一向専念とか一向専念というような、特別の性格をもっているわけなんです。だからお念仏は十八願と二十の願のところにある。念仏というのはそこに初めてあるのであって、十九の願の中にあるように見えても、十九の願にはない。

大谷派の方では慧然師が、念仏は三願に共通すると言われる。それは慧然師の主張にも道理はある。また慧然師に反対する西本願寺派の宗学もある。まあそちらにも道理はある。いま私は、どちらにもいい悪いは言いませんが、しかしまあ一応はすね、やはり慧然師の言われるように、十八願にも十九の願にも、また二十の願にも念仏が三願にわたって、三願通してお念仏がある。そういうふうに言うておいても差支えなからうと思うのであります。

それにしてもすね、お念仏は『大無量寿経』の下巻をみると、上輩・中輩・下輩の三輩にみな念仏がある。とくに「一向念仏」と。つまりまあ称名念仏は、寝ても醒めてもどうしても忘れることのできない、そういう普遍性をもっている。そういうように「一向専念無量寿仏」だが、「一向専念無量寿仏」というたからといって、他の行を全部やめて、お念仏ばかりとなえているのではない。

曇鸞大師は、龍樹菩薩の、易行品というものによって、『往生論註』の一番最初、発端のところに、

謹んで龍樹菩薩の『十住毗婆沙』を案じて云く。菩薩阿毗跋致を求めるに、二種の道あり、一つには難行道、

二つには易行道なり（聖全一―二七九）

と、こういうておられます。まあ曇鸞大師はそういうておられるけれども、どうも『十住毗婆沙論』をみるとこのままではない。はたして、仏説に二つの道が説かれているのか。こういう問題がありますね。たとえば、山口益先生のお話によりますと、仏説には大乘・小乗などという区別はないものだと言われる。仏陀の説法を、本当の、仏陀のご精神をよく握まえないで、仏陀の説法だけを聞いておる。それが小乗仏教だ。しかし仏陀のお言葉を通して、仏陀のご精神にいただく。これが大乘仏教。仏陀の説法は大乘・小乗という区別はないですね。仏陀の説法の聴聞の仕方によって大乘と小乗というものがある。

このお話に関連しますが、天台宗においては教相判釈というのがあります。天台宗には、中国の天台宗、日本天台があります、日本天台は中国の天台宗を更に小さくした系統であるばかりでなく、更に密教とか、禪というものが入っておる。日本天台というのは極めて多岐にわたっているのであります。それで、天台大師智顛の教相判釈というのは、五時八教の教相判釈である。五時というのは、華嚴時、阿含（鹿苑）時、方等時、般若時、法華・涅槃時という五時でしょう。それから八教、八つの教えというのは、化儀と化法を合称したものである。この二つを合せて五時八教という。化儀・化法と申しますのはですね、ちょうど医者さんが、薬を引出しの箱の中に入れて、この薬をこの病人に、どの薬をどの病人に用いたらいいか、とまあそういうふうに考えておるに似ている。仏様は、薬の使用法を相手に応じて与えられるのである。これが化儀・化法ということです。化儀のうちには、頓教・漸教というのが

ある。普通、漸教というのは、長い間かかって一番下からこう修行していく道を漸教という。頓教というのは一足とびに仏になる。それがまあ、普通の頓教・漸教の別でありますけれども、化儀の主張におけるところの頓教・漸教というのは、仏様が衆生を導いておる、その導き方について、頓教・漸教というものを立てているのであります。それからまた化儀のうちには、秘密教・不定教というのがある。これは言葉が繁雑で意味が分りませんですから、秘密教というのは、秘密不定教である。また不定教というのは、顕露不定教である。顕露不定教というのはですね、たとえば小学校で、一年生から六年生まで一人の先生に教えていただく。そういうようなのであります。仏陀のお心は一つでありましょう。一つの円満な教えを衆生の根機におく。ひとつの話を、一年生は一年生流に聴聞するし、二年生は二年生流にする。三年生は三年生で理解する。六年生は六年生流に理解する。そういうのが顕露不定教である。それから秘密不定教というのはですね、一年生には一年生の教科書を、二年生には二年生の教科書を、三年生の教科書を、四年生には四年生の教科書をもたせてやっている先生がいます。そういうようなやり方をするのが所謂秘密不定教。ちゃんと子供のことは知っているから、先生はこれは一年生、二年生と児童一人一人、天分を知っている。それから、化法には、蔵教・通教・別教・円教がある。蔵教というのは、三蔵教のことで、小乗教である。通教というのは、声聞・縁覚・菩薩の三乗に共通している。別教というのは、大乘の菩薩だけ蒙るところの教えである。それから円教というのは、そういう片寄ったものではなくて、全体を網羅するところの円満真実の功德の教えである。まあそういうように、化儀・化法を合せたものが八教である。

四

只今、例を引くためにこのような、天台の教相判釈というものを拝借しました。つまり言ってみればですね、十九の願の方は方便であって、十八願が真実だ。これが教相の伝統でありましょう。善導大師は中国において、この伝統

の趣旨を明らかにされた。それから法然上人は、日本において、阿弥陀仏の本願の趣旨を明らかにされた。親鸞聖人は浄土和讃で、浄土和讃のなかには、大経和讃、観経和讃、それから阿弥陀経和讃という諸経の和讃がありますが、大経和讃の終りの方に二首の御和讃がある。

念仏成仏これ真宗

万行諸善これ仮門

権実真仮をわかずして

自然の浄土をえぞしらぬ

聖道権仮の方便に

衆生ひさしくとどまりて

諸有に流転の身とぞなる

悲願の一乗帰命せよ

(聖全二一四九四)

「念仏成仏」、これは本願成就文では、「往生」とありますが、この「往生」というのは難思議往生でございます。難思議往生は、すなわち成仏である。だからして、念仏往生の願はすなわち念仏成仏の願である。念仏成仏の本願というのは、これは浄土の真宗である。真実の教えである。真実の旨を明らかにしたものである。ところが、それに対して、万行と諸善は、十九の願である。万行というのは仮門である。万行というのは往生しても成仏はしないのだ。

権実真仮というのは、よく教えの思召しというのをよく聴聞すればですね、よく領解できるわけでありますけれども、まあなかなか権実真仮をよく領解するのは、長い間の宿善開発というものによらなければならぬ。議論や理論というものによるのでなく、宿善開発というものによる。それは一朝一夕にできることではない。それは極難信と

いうものである。権実真仮の趣旨はわからない。つまり、権実真仮の区別がはっきり領解できない。権実真仮ということは、阿弥陀仏の思召しというのがあるわけで、それは宿善開發しなけりゃ分かりません。そして、そういう人には自然の浄土というのがある。それは詳しくは無為自然の浄土。無為自然の浄土というものは、知ることはできない。自然の浄土と申しますのは、真実の報土でございます。権実真仮が分からないというのは、つまり真実の報土と方便の化土との区別が分からない。そして、真実の報土を領解しないで、ただ方便化土をめざしておる。それが御和讃の趣旨でございます。

それからして「聖道権仮の方便」というのは、つまり第十九の願を真実だというのが、聖道門の考えでありましょう。諸君は善導大師の教え、善導教学に関する講義をよく聞いておられることと思います。で、この善導大師の教学をよく学ばれた方が、法然上人である。いま和讃に「聖道権仮の方便に、衆生ひさしくとどまりて」とありますが、この聖道門というのはですね、聖道門というのはつまり、阿弥陀仏の十九の願がもとになっている。つまり阿弥陀仏の本願といえはわれわれは常に阿弥陀仏の他力本願だというように今日教えられているわけだけでも、しかし阿弥陀仏の本願の歴史というものが、見えてこない、真にそうであるとハッキリ分らないと思います。長い間、十九の願が本願だと思われてきた。つまり阿弥陀仏の本願というものと、諸仏の本願というものが、別のものではないのであります。だからして、諸善万行を修することのできる人は、やはり自力でもって諸善万行を修する。それは諸仏の御心にかなうし、諸仏の御心にかなえば、阿弥陀仏の御心にかなうのではないだろうか。そういうふうにならずと、考える。考えたあとでありますので、善導大師の時代もそうでありますし、法然上人の時代もそうでありましょう。三部経の中では特に『観無量寿経』が重んぜられておったのであります。

善導大師は皆さん御承知の通り、『大無量寿経』をよくお読みになっておられる。だからして『観無量寿経』を、ごらんになるについて宗祖は、

釈家の意に依りて、『無量寿仏觀經』を按ずれば、顯彰隱密の義あり(聖全二一四七)

と『教行信証』化身土の卷に教えて下されてあります。そういうようなことで、聖道門の人から見ればですね、十九の願の方が本当の本願なんだ。だから十九の願などという話は昔の話で、もうちゃんと善導大師・法然上人・親鸞聖人というような方々によって、願の中の真実の願と方便の願というものがもうはやハッキリと決定されているんだ、とそういうふうには決まっているように思いますが、必ずしもそう決めるわけにいかんと思えますよ。それは、まあそういうことをいえば、それは真宗学を知らん、そういうふうにはまあ非難されるでありましょうけれどもですね、やはり私はですね、そう決めないのが本当だと思う。

『歎異抄』(第二章)の終わりのところに「このうへは、念仏をとりて信じたてまつらんとも、またすてんとも、面々の御はからひなり」と書いてありますがね。決してむりやり念仏を唱えさせるのではない。そういうことは止しなさいと。議論をする場合は、どっちが勝つか分かりません。親鸞聖人や法然上人の口真似をしたからといって、議論に勝つというわけではない。蓮如上人はですね、「人に負けて信をとれ」とおっしゃる。信をとる人は、人に負けるというくらしいのことは覚悟の上です。議論は勝たんでもいいと。議論して勝ったからといって信心を得られるわけではない。議論にころよく負けることができるならば、そして負けることによって、信をとることができるならば、負ける方がむしろよいのである。そういうことがありますね、だから『歎異抄』の第二条の最後のお話の中で「このうへは」、つまりみんなが自分に反対したからといって、この阿弥陀如来の本願は、こわれることはない。また親鸞の信心がこわれるというわけでもない。それはまあ一人一人の自由である。だから十九の願を真実と見ようが十八の願を真実と見ようが御自由であると。そういうようにちゃんと『歎異抄』の第二条に述べておられます。

臨終来迎ということが、十九の願に言われます。だからして諸行往生の願を尊重するわけでありましょう。親鸞聖人ではですね、皆さん御承知でありましょうが、『末灯鈔』の最初のところに、

来迎は諸行往生にあり、自力の行者なるがゆへに、臨終といふことは諸行往生のひとにいふべし。いまだ真実の信心をえざるがゆへなり。また十悪・五逆の罪人のはじめて善知識にあふて、すゝめらるゝときにいふこととなり。真実信心の行人は、攝取不捨のゆへに正定聚のくらゐに往す。このゆへに臨終まつことなし、来迎たのむことなし、信心のさだまるとき往生またさだまるなり、来迎の儀則をまたず。(聖全二一六五六)

と、このようにハッキリと言っておられるわけです。しかしですね、親鸞聖人や法然上人のお書きになったものを見て、今ではもう聖道門なんてないんだろうと思われそうですけれど、しかしちゃんと聖道門があります。一時は浄土門も優勢ですが、たちまち聖道門がもりかえってくる。だからして何も親鸞聖人や法然上人が百人出たからというて、聖道門がなくなるといふことはありません。むしろこの頃は、聖道門は盛んである。

聖道門と浄土門を二つ区別するのは間違うておると、山口益先生などはそういうふうにおっしゃる。それは山口先生がそうおっしゃるのは御勝手でありますけれども、やはりそうではないと思います。今では、真宗学というものは、大谷大学ではちゃんと認められておるが、山口学長時代は、ほとんど真宗学というのは滅亡したような形であった。またそういう時代が来るかも知れません。山口先生は聖道と浄土とか、自力・他力というふうなそういうようなものはないと言われます。自力・他力と二つに分かれるというそういうことは全く間違うておるのであって、唯仏一道といつて、ちゃんと仏法は一筋道である。一道である。だからして、仏法は二道になるといふことなどない。曇鸞大師は仏法に難行道・易行道の二道あると云うが、しかし龍樹菩薩はそんなこと何も云うておるのではないと。このよう

に解釈しておられます。そのように解釈されるのも御自由でありましょう。だから何も念仏ばかり称えているのではない。念仏と諸行というものは何も矛盾するということはない。そういうような考え方もあるのでしよう。私はまあ直接に山口益先生からお聞きしたことはありません。ただ山口先生の書かれた書物によると、仏法一味であって、難行道・易行道と二つあるわけではない。自力・他力二つあるわけではない。自力・他力二つにわけるのは仏陀の御精神にそむいている。こう言うておられる。まあこの大学には山口先生の門下の方々も沢山おられるわけでありますから、皆さんもやはりその先生方の講義を沢山聞かれて、曇鸞大師、善導大師、法然上人、親鸞聖人といった祖師方のとられた難行道・易行道とか聖道門・浄土門というような教相判釈というものが一体正しいのであるか、あるいは間違っているのか、そういうことをよく考えていただきたい。親鸞聖人の歩いた道だけが何も正しいもんだというのではありません。

順彼仏願という言葉がありました。これは、自分の歩いた道が本願他力の意趣にかのうておるかどうかということです。

一心専念^{ニシテ} 弥陀名号^ヲ、行往坐臥、不問^ニ時^ノ久近^ヲ、念念^ニ不捨^{テハ}者、是名^ニ正定之業^ト、順^ニ彼^ノ仏願^ニ故^ニ。

(聖全一—五三八)

これは善導大師のお言葉でありましょう。順彼仏願故という言葉はですね、「仏願に順ずるが故に」と、こう読むことができるとでしょう。『歎異抄』の言葉でいうならば、「本願他力の意趣にそむけり」と。本願他力の意趣にかのうておる。そう親鸞聖人はおっしゃる。そうすると順彼仏願故と同じことになる。だから私どもはやはり、阿弥陀仏の本願というものを見る見方がですね、やはりこう昔から今に至るまで、二つの見方がある。それはまあ『歎異抄』は『歎異抄』の見方がありまして、ここでは本願他力の意趣にそむいておるかどうかということ、こういうように批判を加えてある。しかし、「念仏をとりて信じたてまつらんと、またすてんと、面々の御はからひなり」とも言

われる。「面々の御はからひ」にまかせる。親鸞は、その御自身のただかれた御領解をお述べなされて、そしてこの上は諸君の御自由である。私と同じ道を歩こうが、私と別の道を歩こうが、皆さん方の御自由だ。こう言うておられる。だから冷たい言葉のようだけれども、これはそれほど冷たくもないのであります。最後は、別れてもいいし、一語に行くなら、一語に行ってもいい。こういうような、御心持というのはよく分かると思います。

それで私は、十九の願と十八願と、すなわち諸行往生・念仏往生、自力本願・他力本願というように、二つの道があると思う。やはり本願といえれば他力本願が常のようでありますけれども、本願念仏は自力念仏と他力念仏と二つある。それから、善人のための本願と悪人のための本願と。はたしてどちらが真実であるか、どちらが方便であるのか。このことにつきましても、仏教学の先生方のお考えもありません。聞いてみると心が動揺するから聞かない方がいい(笑)、などと言う人もおられるが、そういうのも間違っておるわけではありませんけれども、それはまあ利己主義というものであります。やっぱり、静かにお話を聴聞した方がよいのでしよう。

まあ難行道・易行道二つの道などない、道は一つしかない。それを廃立などというそういうものの見方をするから、二つあるけれども、廃立などといえ、その反対の人が反対に廃立という。こちらが廃立といえ、むこうも廃立という。法然上人は法然上人流の廃立があり、法然上人に反対する人は、反対する立場の廃立があるのに違いない。だから廃立というたからといって法然流の廃立に限ったものでない。やはりそういう学問もあります。私たちは、心を清くして色々な考え方があるということを気付く必要はなかるうかと、そういうように思うのであります。でなければ、始めから独断論になってしまふ。それは悪いと思います。だからしてもっと山口先生のお言葉によって、大乘・小乗ということを聞かなければならない。釈尊の言葉だけを聞いておるのは小乗、釈尊のお言葉をよく聞いて、そして釈尊の本当の御精神に触れるという、それが大事であります。釈尊の教えに大乘仏教・小乗仏教があるの

でなくして、釈尊の教えを聞く人々に応じて、大乘仏教・小乘仏教というものがある、と。これが山口先生の仏教の解釈でありましょう。山口先生は大仏教学者として尊敬されておられる方です。山口先生が偉いか親鸞聖人が偉いか。親鸞聖人と山口先生と相撲を取るわけにはいけません。だから山口先生がどういふことを言うておられるか、やはりよく聴いておく必要があると思います。

六

それで問題は、仏教では法よりはですね、機の方が大事なのであります。法より機が大切なのです。だからとくに親鸞聖人は、信心ということに重きをおきまして、そしてこの『教行信証』はですね、行から信を開いている。信を開いて、そして如来廻向のお念仏によって如来廻向の信心、如来廻向の信心ということをこう明らかにされた。如来廻向の信心は大菩提心だといわれる。それからして、如来廻向の信心が大菩提心だという、その大菩提心は、願作仏心である。願作仏心が如来廻向の大信心である。浄土の大菩提心は願作仏心である。その願作仏心はやがて度衆生心、願作仏心以外に度衆生心はない。このことを明らかにせんがために「正像末和讃」を作られたのである。そうでしょう。法然上人の教えだけ聴聞した人々は、菩提心なんかいらぬものだ、と。ただ本願を信じて、念仏を称えていればよい、と。こういうように法然上人によって教えられた。それを親鸞聖人は、法然上人の時代は、時代が時代であるから、そのように簡単にお教えになったのである、と了解された。法然上人がですね、敬慕なさっておられるところの善導大師はですね、菩提心ということを述べておられる。菩提心ということを法然上人はおっしゃらないけれども、善導大師はおっしゃる。そうでしょう。

道俗時衆等 各発^{セドモ}無上心^ツ 生死甚難^{ダク}厭^ヒ 仏法復難^シ欣^ヒ 共発^ニ金剛志^ノ（聖全一―四四一）

「金剛の志を発」しということとは発菩提心でございましょう。浄土の大菩提心であります。親鸞聖人が「信巻」

で開顯されたのは、これを明らかにするためであったと、こう思うのであります。ところが、聖道門の方はですね、聖道門の方は、自力の菩提心でありますから、願作仏心を隠して度衆生心を含めている。しかし菩提心の本質というものはですね、菩提心の本質は願作仏心である。願作仏心が本当に菩提心なのである。聖道門では、如来の本願すなわち、他力本願というものを信じない。願作仏心を信用するとですね、度衆生心が成り立たない、とこう考えられる。一方、浄土門は、如来の本願のお助け、廻向をいただく。大菩提心の本質は願作仏心なのでしよう。自分が仏になる、無上涅槃を獲ることは、願作仏心。これが菩提心の本質であります。だから願作仏心即ち度衆生心なのだ。こういうことを述べてある。祖師聖人は晩年に夢のお告げをこうむって、「正像末和讃」六十八首を御製作になりましたが、ここにその御精神があらうかと思えます。

(昭和四十四年九月十八日 大谷大学大学院の講義の筆録である。文責 安富)